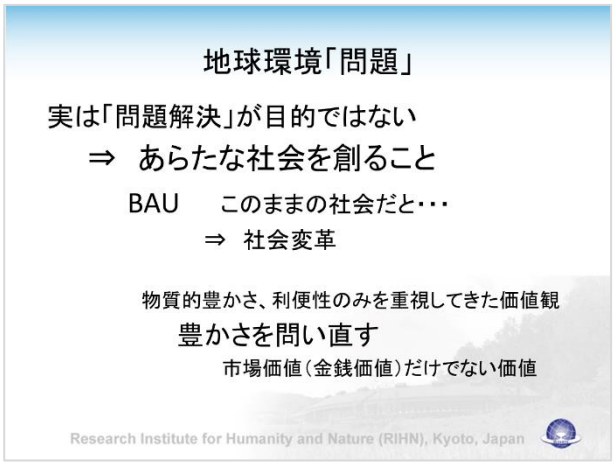
2024.11.19 りそなアジア・オセアニア財団第 12 回環境シンポジウム （於：ウェスティンホテル大阪）

趣 旨 説 明

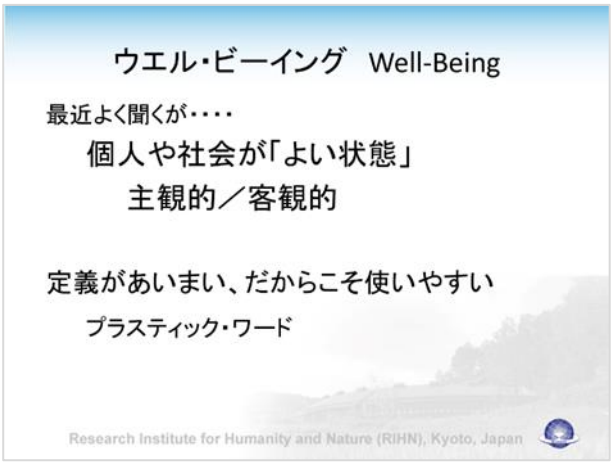
総合地球環境学研究所
名誉教授　阿部 健一

総合地球環境学研究所・上廣環境日本学センターの阿部です。本日の第 12 回りそなアジア・オセアニア財団環境シンポジウム「ウェルビーイングを考える～みんなで踊りを：自然から“いのち”へ～につきまして、何故このようなテーマで行うのか説明させていただきます。

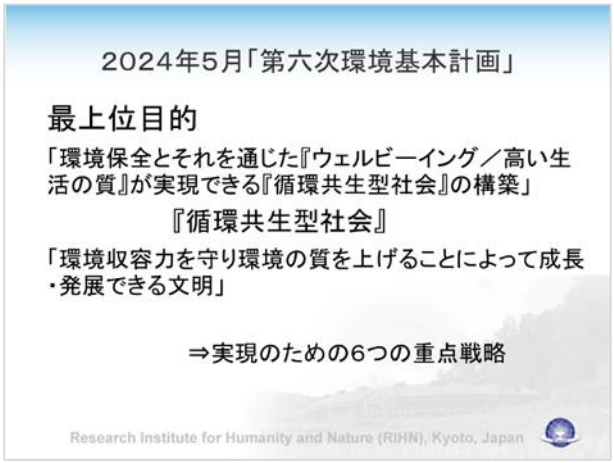


簡単に言えば、「どうよりよく生きるかをみんなで考えましょう」ということです。多くの人が誤解していると思うことがあります。「地球環境」というと、後ろに必ず「問題」が付いてきます。子どもたちへ「地球環境」を聞いても、問題を解決しなければならないという答えが返ってきます。これは半分正しいのですが、誤解も大きいと考えています。というのは、地球環境問題とは問題解決することが目的ではなく、新たな社会を作らなければならないということなのです。もう少し言葉を足すと、新たに豊かな社会をつくり直すということになろうかと思います。

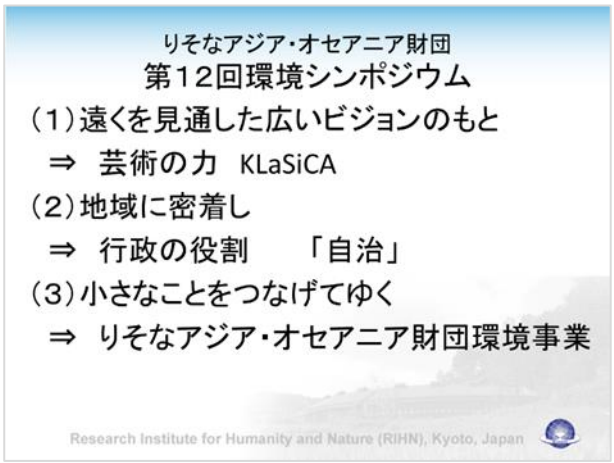
地球環境問題は、2000 年代以前から地球環境の危機を科学的データで明らかにした様々な報告書が出ています。その中でよく出てくる言葉が BAU（ビジネス・アズ・ユージュアル）です。これは、いまのままの生活を続けていくと地球は駄目になる、つまりそこに住むわれわれ人類の未来はないということです。それらはいわば第 1 段階であり、現在は既に第 2、第 3 段階まできています。このままでは駄目になるので、新たな社会、新たな豊かさ、今までとは異なる価値観に基づいた社会をつくっていかなければいけません。豊かさというとどうしても物質的な豊かさや生活の利便性を考えてしまいます。そうではなく、GDP や金銭で測ってきた指標とは異なる大切な価値を踏まえて豊かな社会を考えなければならないことを、今回のシンポジウムの背景としています。



ウェルビーイングという言葉を最近よく耳にされる方が多いと思います。個人、あるいは社会が良い状態になるということです。主観的であれ客観的であれ、良い生活をおくることができる、良い社会の中で生活するということです。幅広い意味を持つ言葉で定義自体が曖昧ですので、私は敢えてよりよく生きるためにはどうしたらいいのかと日本語で言ったりしています。



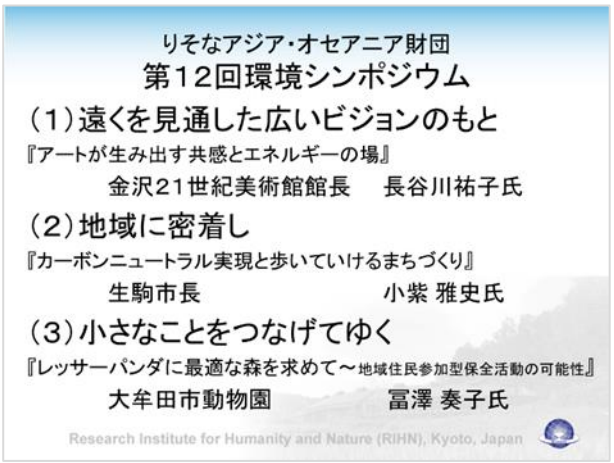
しかしこの言葉は、2024 年 5 月に策定された第 6 次環境基本計画の最上位目的の中で「環境保全とそれを通じたウェルビーイング」として使われており、高い生活の質が実現できる循環共生型社会を構築することが我が国の環境計画における一番大きな目標となっています。ちなみに環境共生型社会に関しては、「環境収容力を守り環境の質を上げることによって成長・発展できる文明」と定義されています。



こういったことをベースに置き、この環境シンポジウムで皆さまと一緒に考えたいと意図しているポイントが3つあります。一つ目が、遠くを見通した幅広いビジョンです。二つ目は、地域に密着するということです。地球環境問題は地球全体の事を考えなければいけないと思われるかもしれませんが、解決あるいは豊かな社会をつくるにはまず地域に密着しておく必要があると考えています。三つ目が、環境事業は小さなことから始めること、そしてそれが世界につながっていくように考えましょうということです。

1 番目のビジョンに関しては、芸術の力をお借りしようということです。先ほど環境省の環境基本計画を紹介しましたが、これはとてもよく練り込まれたものです。我々研究者は事実関係に基づいた研究を積み重ねています。これもとても大事なことだと思っています。しかしそれだけでは社会へは響きません。そこで我々が頼っているものが、実は芸術なのです。

われわれの研究所では、KLaSiCa（Knowledge, Learning, and Societal Change）という国際的な環境学習プログラムがあります。このプログラムは、社会を変えていくためには芸術とナラティブ（物語）が必要であるとの考えの下これらの力を借りて社会を変えていこうとするもので、研究所も私自身も創設以来メンバーとして、このプログラムに関わっています。2 番目の「地域に密着し」に関しては、「行政」の役割が非常に大きくなります。副題に「みんなで」という言葉を挙げていますが、まさに大切なものは自分たち「みんなで」守り、自分たちの将来をさらにより良きものに変えていくことが「自治」ということです。そういった意味から「自治体」の役割は、今後ますます重要になってくると思います。3 番目の「小さなことをつなげてゆく」とは、りそなアジア・オセアニア財団が行っている環境事業ということが言えると思います。



そのような中で、最初の芸術の力ということについて、金沢 21 世紀美術館の館長である長谷川さんに登壇いただきます。「アートが生み出す共感とエネルギーの場」ということで、共感は大事なことです。環境省の方や研究者が、いろいろな文言、言葉を頼りに発信していますが、言葉だけでは人は動きません。芸術の力、共感というのは、とても大切なことだと思っています。更にそれだけではなく、新しいエネルギーを生む場であると思っています。長谷川さんより、共感とエネルギーの場をアートがどのようなかたちで生み出しているのかをお聞きしたいと思っております。

「地域に密着し」ということに関しては、奈良県生駒市長の小紫さんにお越しいただきました。ちなみに小紫さんは環境省ご

出身ということで、最近は環境省出身の首長の方が多くなられたと感じています。前回のシンポジウムに登壇いただいた炭谷さんも環境省初代の事務次官で、環境と福祉が自分たちの最も大切なものと話されていました。今回の小柴さんからは、キーワードは「まちのえき」ということになろうかと思いますが、生駒市の事例をお話ししていただくことになっております。

最後は大牟田市動物園の冨澤さんです。この動物園、入口の黒板に「この動物園には象はいません」という注意書きが書いてあります。象は群れをなす動物で、一人ぼっちでは生きられない動物で、大牟田市動物園は小さな動物園なので象は飼えないのです。象のことを思ったら象は飼えない、自虐的ですが実は深く生き物のことを考えている動物園です。動物園のこと、そしていま動物園の役割がどんどん変わっていっています。新しい動物園像、それが今日お話しいただく「レッサーパンダに最適な森を求めて」というりそなアジア・オセアニア財団の環境事業に採択された事業で、その進捗をお聞きできればと思います。

以上で私の趣旨説明を終わりたいと思います。

（終了）